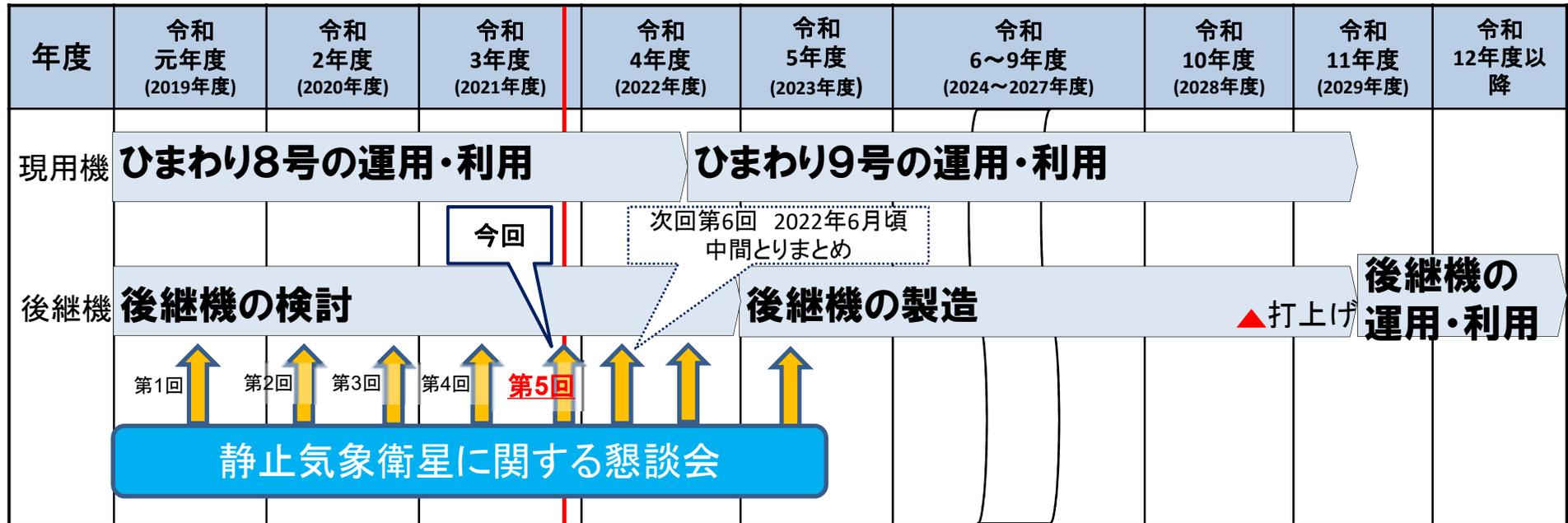


今回は、これまでのひまわりデータの具体的な活用分野などの議論を踏まえて、今後産学官が連携してひまわりデータの利活用を促進していくために必要な取組について、ご議論をお願いします。

## 議事次第

- データ利用研究推進グループからの報告
- 産学官連携の推進や次期気象衛星等に関連した気象庁の取組
- ひまわりのデータ利活用促進の取組について
- 中間とりまとめの骨子案について

# 静止気象衛星に関する懇談会



## 「静止気象衛星に関する懇談会」の開催状況

- 第1回（令和元年9月3日）： 静止気象衛星ひまわりの役割・意義
- 第2回（令和2年7月21日）： 国内外の技術動向、最新の科学技術の導入
- 第3回（令和3年2月24日）： 民間のニーズ、事業実施方法
- 第4回（令和3年8月26日）： さまざまな分野における利活用
- 第5回（令和4年3月8日）： データ利活用促進の取組

# ひまわり後継衛星の整備検討スケジュール

- 令和2(2020)年度
  - 仕様に関する基礎的事項の検討
  - 調達・運用方法調査
- 令和3(2021)年度
  - 年度前半で利用者要求聞き取り終了(例:日本気象学会春季大会)
  - 通信技術調査
  - 宇宙開発利用加速化戦略プログラム(～2023年度)
- 令和4(2022)年度
  - 中間とりまとめ(6月頃)
  - 概算要求提出 …… 年度前半に仕様確定
  - 次期気象衛星の実現すべき機能及び効率的な運用に関する調査実施
  - 衛星製造契約にかかる手続き開始(資料招請、入札公告等)
- 令和5(2023)年度: 製造契約
- 令和10(2028)年度: 衛星打ち上げ
- 令和11(2029)年度: 運用開始

# 衛星整備について委員の皆様からいただいた主なご意見

- 常に最新技術を導入できる更新計画
  - (第1回)「ひまわり」後継衛星の必要性は当然であるし、新しい科学技術を導入して、国際的にも将来標準となる衛星を整備していくべき。
  - (第2回) 衛星センサの寿命が10年に伸びることがわかったことから、1機ずつ順番に整備することで最新技術を導入可能にする方法もあるので、後継衛星では衛星の機数やライフサイクルについても検討するべき。
- 赤外サウンダ等、効果的な新型センサの導入検討
  - (第2回) 将来の静止軌道からの観測センサとして可能性が高く利用が期待できるのは、イメージャ、赤外サウンダ、雷センサの3つである。
  - (第2回) 激甚化する気象現象から人命や国民の財産あるいはインフラを守るためにも赤外サウンダ等の新しい技術の導入について検討するべき。
- 既存機能を前提に、更なる利活用を見据えた改善の検討
  - (第3回) ひまわりは台風や線状降水帯など防災・減災、国土強靱化に重要であり、後継ひまわりでさらに力を発揮させることが大切。ひまわり後継のイメージャは緑バンドの中心波長を0.55マイクロメートルに変更するとともに1.38マイクロメートルのバンドを追加することでさらなる効果が期待できる。
  - (第4回) 国際的な協力体制の中で日本のひまわりが果たしている役割や、外国へのひまわり利用技術普及による貢献は重要。